得意、不得意の理解

敦賀市立松陵中学校　二年　森山依空

人には、それぞれ得意なこと、不得意なことがある。私は今までの経験から、人それぞれの得意、不得意を理解し、支えあえるような社会になってほしいと感じるようになった。

私は小さい頃から運動が人一倍苦手だった。走るのは遅いし、体力も全くない、球技はすぐボールにぶつかる、とまるで駄目である。自分がただ運動ができないだけなら別にいいのだが、学校の体育の授業では必ずリレーや大縄などのチームで行う運動をする。これがとにかく嫌だった。なにしろ、私みたいな運動ができないやつは足手まといでしかないのだ。そのため、私とチームになったことが分かると嫌な顔をする人もいた。私が何か大きなミスをすれば白い目で見られた。私のせいでリレーの順番が逆転して負けてしまったこともあった。自分では至って真面目にやっているのだが、あまりにも酷いからかふざけてやっていると思われたこともある。時には陰口をされた。こんなことばかりで、私は元々嫌いだった

運動が年を重ねる度により一層嫌いになっていった。たとえ勉強ができなくても、美術で絵が描けなくても、家庭科で裁縫ができなくても、基本的に授業で迷惑をかけることはない。しかし体育は運動ができなければほとんど迷惑をかけるのだ。体育さえなければ、私はこんなに嫌な思いはしないのに。そんな少し偏った考えを持った私は、段々周りの人達が憎たらしく思えるようになっていた。たしかに自分みたいな存在は体育においてとても迷惑だろう。しかし好きでこんなに運動ができないわけではない。自分なりに、一生懸命やっている。不得意であることを理解して対応してほしい、と不満に思っていた。しかし、私はこのようなことをこの前、逆の立場で経験したのである。

毎年七月に学校で行われる合唱コンクールで、私は合唱責任者になった。私は吹奏楽部に所属しており、ピアノも数年習っていたことがあったので、音楽は少し得意だった。合唱責任者の仕事は、合唱練習で全体の指示を出すこと。私ははりきって、責任者として練習を仕切るようになった。ソプラノ・アルトパートはみんな頑張って歌っていたが、それ以外のテノールパートの人達があまり真剣に取り組んでいなかった。最初の方こそ目を瞑っていたが、段々その態度や歌にイライラするようにな

った。いつまで経っても合わない音程、何度注意してもくり返すミス、集中力の無さ。酷い状態だったので私の指示をする口調も強くなっていった。それでも一向に良くはならず、それどころかもっと集中力が無くなったように見えた。余計に腹が立った私は、〝いっそのことテノールパートなんていない方がマシなんじゃないか。いても迷惑〟と思った。しかしそう思った瞬間、体育で嫌な態度をとってきた人達と、自分自身が重なった。その考えは、あの人達と一緒なのではないか。私は自分の合唱練習の時の行動をふり返った。テノールパートは確かにあまり真面目に取り組んでいない人は多かった。でも、全くいなかっただろうか。中には一生懸命やっている人もいるにもかかわらず、ちゃんと見ずに勝手に迷惑だと決めつけていたのではないか。それに、音程を合わせたり、音楽においてミスをすぐに直すのは難しい。「できない＝真面目にやっていない」ではないのに、合唱が良くならないから真面目ではないと勝手に思っていたのではないか。私は、責任者としてふさわしくない考え方をしていたと、自分を責めた。思えば、テノールパートは音楽が苦手な人が多かった。しかし私はそれを全く尊重せず、責めるような言い方ばかりしていた。反省した日から私は、迷惑になるという決めつけをやめて練習の指

示を出すようにした。すると、テノールパートの人の中にも頑張っている人がいるということに気づいた。その中には音楽が不得意だと言っていた人もいた。例え不得意であろうとも、一生懸命やってくれている。その歌が拙くても、尊重するべきだと、私は思った。

コンクール本番では、最高の合唱ができて、優秀賞だった。この結果になったのは、得意でも不得意でも、決めつけることなく、みんなで協力できたからだと、私は思う。だから、得意、不得意を理解し、支えあえる社会が、良い結果につながると思う。